
子どもに対するデス・エデュケーションのための
プログラム開発に関する研究

平成12～14年度 長野県看護大学特別研究成果報告書

平成15年3月

研究代表者 竹内幸江
(長野県看護大学)

目 次

研究課題	1
研究組織	1
研究経費	1
研究発表	1
研究目的	2
研究経過	3
研究成果	
1. ワークショップ	6
2. 教育プログラムの実践例①	13
3. 教育プログラムの実践例②	18
4. 教育プログラムの実践例③	22
5. まとめ	25
6. 総合学習の時間における人形劇制作	26
研究協力者	37
人形劇①脚本「ぼくの心の中に…」	39
人形劇②脚本「赤い鼻のポポー大切なこと」	53

研究課題

子どもに対するデス・エデュケーションのためのプログラム開発に関する研究

研究組織

研究代表者	竹内幸江	長野県看護大学	助教授（小児看護学）
研究分担者	北山秋雄	長野県看護大学	教授（健康・保健学看護学）
	内田雅代	長野県看護大学	教授（小児看護学）
	安田貴恵子	長野県看護大学	教授（地域看護学）
	扇 千晶	長野県看護大学	助手（小児看護学）
	平出礼子	長野県看護大学	助手（小児看護学） （平成 13 年度～）
	青木真輝	長野県看護大学	助手（小児看護学） （平成 14 年度～）
	栗林浩子	元長野県看護大学	助手（小児看護学） （平成 12 年度）
	寺島憲治	元長野県看護大学	助手（小児看護学） （平成 12～13 年度）

研究経費

平成 12 年度	493,500	円
平成 13 年度	486,400	円
平成 14 年度	372,100	円
合計	1,352,000	円

研究発表

竹内幸江，北山秋雄，寺島憲治，扇千晶，平出礼子，安田貴恵子，内田雅代：子どもへのデス・エデュケーションの試み．第 13 回長野県小児保健研究会，2001.6.30，松本市．

竹内幸江：人形劇を用いた子どもへのデス・エデュケーションの試み．第 25 回日本死の臨床研究会，2001.11.18，仙台市．

竹内幸江（2002）：人形劇で死の概念の 3 つの構成要素を知る．近藤卓編，いのちの授業．72-75，実業之日本社，東京．《3.24》

研究目的

近年の大きな社会問題として、犯罪の低年齢化があげられる。「キレる子どもたち」とされ、些細なトラブルから傷害や殺人事件におよぶケースが多数報告されている。さらには自殺の低年齢化、特に少年層の自殺の増加も問題となっている。こうした状況の中、子どもたちに生命、いのちの大切さを教えることが重要であると指摘されるようになってきた。

私たち研究グループは、この命の大切さを理解するためには、死ということを正しく理解することも必要であると考えた。現在は、高齢化社会により、以前なら小児期に体験した祖父母の死も青年期以降に体験するようになってきている。また、核家族化が進むこともあいまって、小児期に身近な人の死を体験し、そこから何か生と死に関することを感じ、学ぶという機会が少なくなっている。学校教育では、正式なカリキュラムとしてではないが、命の大切さを教えるという目的で「いのちの授業」などを総合的な学習の時間で実施している学校も増えつつある。反面、実施していない理由として、適切な教材がないこと、指導方法がわからないことをあげる教員が多いのも事実である。そこで、子どもたちが死を理解するためには、何らかの教育プログラムが必要であると考えた。

子どもが死を理解する過程に関する研究は、死の概念発達ということで数多く報告されている。死の理解とは、生物と無生物の識別から、死の概念の構成要素とされる「死んだ者は動かない、それまでの生体の機能が停止する」という死の不動性、「死んだ者は生き返らない」という死の不可逆性、「誰にも必ず死はおとずれ、避けられない」という死の不可避性（普遍性）を正しく理解することとされている。死を理解する発達過程は、国や文化の違い、時代の違いによって相違がみられるが、一般的に小学1年から4年ぐらゐの間に成人と同じ死の理解が進むといわれている。そこで、対象を小学生とした教育プログラムを考えることとした。

この研究の目的は、子ども(主に小学生)を対象に、死の準備教育のためのプログラムを開発し、その使用方法や教育効果を明かにすることである。

研究経過

この研究を進めるにあたり、「ボウルディン・子どもの生と死を考える会」を発足させた。この会の活動目的は、子どもたちに命の大切さを理解してもらうため、そして、子どもが身近な人や動物の死を自分なりに受け入れることができるために、どのように死を教えたらいいか考えることである。会の主なメンバーは、当研究グループメンバーおよび保育士、学生である。

研究会でまず行なったことは、教育プログラムとしてどんなものが妥当か考えることであった。そのため子ども向けの本や、海外の教育プログラムについて検討を行なった。最近では、死や死別を題材とした子ども向けの本も多くみられるようになった。代表的なものとして、木の葉っぱの生涯から死について考える「葉っぱのフレディ〜いのちの旅」(童話屋刊)、老衰で亡くなったあなぐまの死から、生命は終わっても一緒に過ごした思い出は消えないと語りかける「わすれられないおくりもの」(評論社刊)などがある。これらを参考にした結果、視覚的にも効果があり、子どもたちがその主人公になったつもりで考えることができると思われる人形劇を制作することとなった。

人形劇はまず、「死ぬってどういうことなのか？」をテーマに脚本を作り、舞台装置や大道具小道具など人形以外はすべて手作りで行なった。人形の声や操作を担当したのは、研究メンバーとボランティアの学生である。人形劇の経験者がいない中、保育士に協力していただいたり、人形劇の講習会に参加したりして、何とか上演することができるようになった。人形劇のタイトルは「ぼくの心の中に…」である。

そして、この人形劇を客観的に評価してもらい、私たちの活動を広報するために、ワークショップ『死ぬってどういうこと？』を開催した。ワークショップの内容は、「ボウルディン・子どもの生と死を考える会」の説明、人形劇「ぼくの心の中に…」の上演の後、上智大学教授のアルフォンス・デーケン先生をお招きして、「生と死とユーモア-子どもに死をどのように伝えるか-」というテーマで講演していただいた。ワークショップには、「伊那谷生と死を考える会」の協力をいただき、子どもから大人まで約200名の参加が得られた。アンケートの結果、人形劇に関しては、8割近くの人から「内容もよく、子どもにもわかりやすい」との回答を得た。

次に、この人形劇を教育プログラムとして実施することとし、伊那市内のI小学校に協力依頼した。まず、この小学校の特殊学級として配置されている一般病院の院内学級にて、担任教諭の協力を得て、録画した人形劇のビデオを見てもらった。在籍していた子どもは小学1年生から4年生までの4名で、その子どもたちの反応から対象として4年生が適当ではないかと考えた。そして、院内学級の担任から本校の4年生のクラスを紹介していただき、学校長の許可を得て、授業として人形劇の上演を行うこととなった。学級担任教諭には、事前に人形劇の主旨を説明し、劇終了後の話し合いの進め方、感想を含めたアンケートの内容について相談した。プログラム実施に際しては、当大学の学生がボランティアとして協力してくれた。人形劇を見た後に、感想や自分の体験や考えを言い、感想文を書くというプログラムは、子どもたちにも受け入れられたが、子どもたちから上手く話を引き出すにはどうしたらよいか、その後の評価をどうするかなどの課題が残った。

死ぬってどういうことなのかを伝える他に、今度は命の大切さについて伝える人形劇を制作したいという意見が研究メンバーからあがった。そこで、「いのちを大切にす」というテーマで脚本を作った。人形劇のタイトルは「赤い鼻のポポー大切なこと-」である。前回の人形劇同様、今回も人形以外の大

道具などは全て手作りとし、人形の声や操作も研究メンバーとボランティアの学生で行なった。

この教育プログラムは、駒ヶ根市内の H 小学校 3 年生のクラスで実施し、前回のプログラム同様、人形劇を見た後、自分の体験や考えを言い、感想文を書くという内容にした。ここでも、人形劇は受け入れられたが、子どもたちから話を引き出すには、ある程度の技量が必要であることを感じた。

この H 小学校で人形劇を上演したことが、信濃毎日新聞および長野日報新聞の掲載されたことを機に、長野県内の小学校や幼稚園などから問い合わせがあった。しかし、人形劇を上演するには、舞台設営に時間がかかること、人形操作のために人手がいることなどの理由で、遠方に行けないことが残念であった。そこで、2 番目に制作した人形劇をビデオに録画した。そして、ビデオ上映によるプログラムを四賀村内の A 小学校 3 年生のクラスで行なった。実際に上演する人形劇と比べ、ビデオの視聴では子どもたちの反応も違うことが予想されたが、ビデオでも子どもたちは熱心に見入り、話し合いの内容も充実したものとなった。

また、H 小学校では子どもたちが人形劇に興味をもち、自分たちでもやってみたいと相談を受けた。そして、研究メンバーが小学校に出向き、約 4 か月間総合学習の時間に人形劇の制作を行なった。当初は、いのちの大切さをテーマに各自の体験から人形劇の脚本を考えることを意図したが、年齢的に難しく、既存の本などから好きな話を選び、10 名ずつ 3 グループで行なうこととなった。人形以外は、全て子どもたちの手作りで、人形の声や操作も自分たちで行なった。完成後は、授業参観で発表するとともに、市内の保育園や老健施設で上演を行い、子どもたちも充実した時間を過ごしたようであった。

平成 11 年 11 月 19 日	「ボウルディン・子どもの生と死を考える会」発足
平成 11 年 12 月～	
平成 12 年 2 月	活動方針の討議 死を扱った子ども向けの本のレビュー 子どもの死の概念発達を踏まえた上で、どのように子どもに死を伝えることができるか検討し、人形劇を取り入れることを決定
平成 12 年 3 月～ 9 月	人形劇①「ぼくの心の中に…」脚本作り・内容検討
平成 12 年 10 月～	
平成 13 年 2 月	人形劇①「ぼくの心の中に…」舞台装置・大道具・小道具作り
平成 13 年 2 月 6 日	学生ボランティア募集し、配役決定
平成 13 年 2 月 15 日	人形劇①「ぼくの心の中に…」セリフ録音
平成 13 年 2 月～ 3 月	人形劇の練習
平成 13 年 3 月 24 日	ワークショップ開催 テーマ：死ぬってどういうこと？ 人形劇①「ぼくの心の中に…」上演 講演「生と死とユーモアー子どもに死をどのように伝えるか」 上智大学文学部教授 アルフォンス・デーケン先生
平成 13 年 6 月	I 総合病院・院内学級にて人形劇①「ぼくの心の中に…」のビデオ学習

- 平成13年7月18日 伊那市内のI小学校にて人形劇①「ぼくの心の中に…」に基づく教育プログラムを実施
- 平成13年6月～
- 平成14年4月 人形劇②「赤い鼻のポポ」脚本作り・内容検討
- 平成14年4月22日 学生ボランティアを募集し、配役決定
- 平成14年5月10日 人形劇②「赤い鼻のポポ」セリフ録音
- 平成14年6月～7月 人形劇の練習
- 平成14年7月18日 駒ヶ根市内のH小学校にて人形劇②「赤い鼻のポポ」に基づく教育プログラムを実施
- 平成14年10月16日～
- 平成15年3月5日 H小学校にて総合学習の時間に人形劇制作
- 平成14年9月～12月 人形劇②「赤い鼻のポポ」ビデオ制作準備
- 平成15年1月15日 ビデオ録画
- 平成15年2月4日 四賀村内のA小学校にて人形劇②「赤い鼻のポポ」ビデオに基づく教育プログラムを実施
- 平成15年3月29日 講演会「いのちの教育を考える」開催
講師：東海大学教授 近藤卓先生

研究成果

1. ワークショップ

開催日時： 平成13年3月24日（土）
開催場所： 長野県看護大学 大講義室
テーマ： 『死ぬってどういうこと？—子どもに死をどのように伝えるか—』
プログラム内容： 13：30～14：00 「ボウルディン・子どもの生と死を考える会」紹介
14：00～14：30 人形劇「ぼくの心の中に…」上演
14：40～16：10 講演「生と死とユーモア」
講師：上智大学文学部教授
アルフォンス・デーケン先生

参加者は子どもから大人まで約200名であった。ワークショップ終了後、人形劇の内容や、子どもへ死を伝えることについてどう思うかなどアンケートを依頼した。その結果、19歳から75歳まで58名から回答が得られ、そのうち29.3%の人が、子どもに死について尋ねられた経験があると答えていた。聞かれた状況は様々であるが、「日常の中でも『死』という会話は出てくるがあまり意識していないようだ」との回答もみられた。子どもに死を伝えることについては、ほとんどの人が、必要であり機会があれば話していきたいと考えており、話すのに抵抗がある、必要ないという人はいなかった。

アンケート結果（回答58名）

回答者・年齢（19～75歳）

10代	1	30代	11	50代	9	70代	3
20代	11	40代	6	60代	9	無回答	8

回答者・性別

男性 2 女性 54 無回答 2

回答者・職業

看護職	13	無職	5	パート	2
主婦	10	農業・自営業	3	団体職員	1
学生	10	福祉関係	2	無回答	12

回答者・15歳以下の子どもの有無

いる 13 孫がいる 4 いない 30 無回答 11

1. 人形劇の内容について

a. 内容もよく、子どもにもわかりやすい 46 (79.3%)

- ・…、と思うのだが、うちの子ども(9歳)にとってはダメだったようです。(34歳・女)
- ・多方面に目配りができているだけでなく、人形劇としても親しみやすく、わかり易い良いものだったと思う。(女)
- ・人形がかわいらしい。子どもの心の変化、捉え方が良く理解されているなど感じた。(19歳・女)

b. 内容はよいが、子どもには難しい 1 (1.7%)

c. よくなかった 0

d. わからない 4 (6.9%)

e. その他 3 (5.2%)

- ・“子どもの言葉”を使った表現が少ない。(44歳・女)
- ・もっと感情がこもって涙が出る場面があるといいと思う。(58歳・女)
- ・小学1~3年の児童にどのくらい理解能力があるのかがわからないので、子どもにわかりやすいものだったかどうかわからない。(21歳・女)

無回答 4 (6.9%)

2. 子どもに死について伝えることについて

a. 必要なことだと思うし、機会があれば話していきたい 51 (87.9%)

- ・大人でも生と死は難しい。機会を何回ももって繰り返して質問にも答えていけば理解できると思う。(72歳・男)

b. 必要なことだと思うが、話すのには抵抗がある 0

c. あえて伝えなくても自然にわかってくる 3 (5.2%)

d. 必要はない 0

e. その他 4 (6.9%)

- ・伝えることは必要だが時期が大切。子どもの興味のない時に話しても理解できないと思う。むやみに怖がるだけ。身近に死という事実と直面した時、子どもが子どもなりに真剣に考えられる時、親と一緒に考えてあげたらいい。(21歳・女)
- ・絶対に必要。(21歳・女)
- ・すごく抵抗を感じるが、必要だと思うので話していきたい。(21歳・女)
- ・自然に理解できるので、あまり小さい頃から知る必要はない。(58歳・女)

3. このような教育プログラムは必要か。

a. 必要である 54 (93.1%)

- ・子どもにも親にも必要。小学生の頃教室で飼っていた小鳥が死んだ時、先生は何も教えてくれなかった。(19歳・女)

b. 必要ない 0

c. わからない 3 (5.2%)

- d. その他 1 (1.7%)
- ・正直に話すこと (75歳・女)
 - ・身近な人の死を体験すること (21歳・女)

4. 子どもに死について尋ねられた経験

- a. ある 17 (29.3%)
- b. ない 23 (39.7%) (聞かれたことはないが話した 1)
- c. おぼえていない 14 (24.1%) (なんとなく話したような気がする 1)
- 無回答 4 (6.9%)

【子どもに死について尋ねられた状況】

身近な人の死

- ・曾祖父の死。子ども (小2、小4) は泣いていた。
- ・母方の実家の祖母が亡くなった時。
- ・同じ病気 (膠原病) で祖父が死んでいくことを知った時、自分が膠原病であることを知っていたため「私も死ぬの？」と聞かれた。(小6)
- ・娘と歳が違わないところが死んだ時。病気について、また薬について、両親の思い等細かく聞かれた。(高3)
- ・祖父が癌だと診断された時、子どもたち (13歳、8歳) と死について話した。祖父を2年間在宅でケアした。
- ・既に亡くなっている父方の祖父について、母方の祖父は元気なのにどうしてそんなに早く死んでしまったのか。面識がなかったのでどんな人だったかなど。(8歳)
- ・尋ねられたというより、身近なおじいさん、おばあさんの死の時にはなるべく立ち合わせて、身近なものとしての捉え方をしてもらおうとしているが、死をどう受け止めて語るかは難しい。(7歳、4歳)

飼っていた動物の死

- ・金魚、カブト虫が死んだ時。「死んでしまったんだね」と、一緒にお墓を作った。子どもは3歳であり、死ということを重大には捉えていないようだったので、深い説明はしなかった。次に子どもが知りたがった時に話したいと思う。日常の中に「死」という会話はでてくるが、あまり意識していない。

入院している子どもから

- ・小児病棟で働いていた時「〇〇ちゃんは何？」と聞かれ、「お家に帰ったんだよ」と話したら、それ以上は聞いてこなかった。嘘はつきたくないと思っていたが、あまりはっきりさせたくないとも思っていた。子どもたちは、こちらの「聞かれたくない、どうか聞かないで」という気持ちを察して「聞いてはいけないこと」と捉え、聞いてこないような気がする。「聞かれたくない」という態度をとらないためには、自分が開かれた心でいられるような豊かな人間性をもたないと難しい。
- ・入院中の青年期のがん患者と死について話をした。
- ・精神障害者の施設で。こんな自分は世の中のためにならないし、毎日が生きていて苦しい、死んだ方が楽になる。(20~30歳の多数の男性)

本やTVがきっかけで

- ・TVのアニメか何かを見て聞かれたと思う。
- ・「幸せの王子」を読んで真剣に考えた様子だった。親も真面目に話をしたように思う。家族の死もあったので余計に真剣だったと思う。小さい時の体験はとても良いことと思う。
- ・8歳時、「さようならっていわせて」を読んであげたが、「死」と言う言葉にパニックになり、私との死別を連想してしまい母親との別れが全く受け入れられないことで、それ以後死については拒絶反応を示している。「なんでそんなこと(=死)話すの!そんなこと言うの!」と興奮し大泣きしていた。

その他

- ・保育園の頃かそれ以前、様々な死の場面について少しずつ本人なりに考えたらしく、「どうして死ななければならないのか」と問われた。特別緊張感のある状況ではなかった。

【人形劇について】

- ・子どもの感想——ケンのお母さんが初め嘘をついた時はびっくりした。劇の内容はよくわかった。少し泣いてしまった。(8歳)
- ・子どもはふくろうおばさんの登場以来目をそらしてしまい、感想を聞いても「やだー」だけだった。親と子の別れを人形劇の中でも受け入れられないのだと思う。(9歳)
- ・子どもにどうだった?と聞くと、「わからない」と答えた。(5歳)
- ・わかりやすかった。「別れは必ず起こるもの、でも心の中で生きている」ここが強調されていて、「死=悲しい」だけではないことが伝わったと思う。(21歳)
- ・フーを見つけながら、少しずつ別れる、いなくなるということについて知っていく、考えていくことが良かった。答えというより一緒に考えさせてくれる劇で良かった。(37歳)
- ・とても誠実に語られていた。(39歳)
- ・とてもわかりやすく、子どもだけでなくおとなにも十分なものだった。心に伝わるものがあった。よかった。(20歳)
- ・身近なテーマで子どもにもわかりやすかった。(60歳)(50歳)(46歳)
- ・死の原則的なことについてわかりやすく示されていて良かった。(45歳)
- ・無理した演出でなかったことに真実味があった。子どもにもきつと何かを伝えることができたと思う。
- ・小1~3向けとのことだが、4歳以上の子どもであれば理解できそうな内容であった。機会があれば子どもにも見せてあげたい。(33歳)
- ・とてもわかりやすい内容で、声のトーンや話し方、タイミングも良く、練習を重ねた結果だと思った。ペットの死ということで、子どもたちに教えるには段階を踏むことで少しずつ受け入れられるのではないかと思う。(31歳)
- ・具体的な表現が多く(冷たくなる、しゃべらなくなる等)、子どもにはわかりやすかったと思う。身体的にどうなるかは何となく伝わったが、精神・心の部分がどうなってしまうかがよくわからなかった。でもこれは大人にもはっきりわかることではないので、成長し死と直面した時学べばいいことかもしれない。自分に子どもがいても「心の中にいる」と言ってあげたいが、その言葉の意味がちゃんと伝わるかどうかわからない。「死」については「生」と同様自分なりの受け止め方で自分なりに考える部分は多いと思う。(21歳)
- ・内容はわかりやすく、よく一般に言われる「死んだらどうなる?」とか「死ぬってどういうこと?」

- の答えになっていると思った。けどそれが本当に死ぬということなのかわからない。しかし、デーケン先生の話にもあったように、真実の死を伝えるのが重要なのではなく、子どもが知りたいと思った時にちゃんと向き合って大人や親の考えている死を伝えて、子ども自身が考え受けとめていけるように援助することが大切だと思った。(21歳)
- ・自然に死を受け入れるということが、こんなにもわかりやすく劇になっているなんて驚いた。日本人にありがちな悲嘆、つまり負の要素だけでなく「心の中に生き続けること」に注目したことが素晴らしく、意味のあることだと思う。死に触れた時、自分が死ぬことを子どもたちはどう受け止めるのか、そこに触れてもよかった。(19歳)
 - ・良い内容だと思った。身近に子どもがいないので、子どもがどの程度理解できるものなのかわからないが、夢と現実の場面の切り替わりが少し難しいのでは思った。(20歳)
 - ・大変身近でわかりやすかったが、小1～3を対象とすると少し難しいと思った。(35歳)
 - ・大変素晴らしい出来だった。あえて言うなら、ナレーションを使うことで内容もすっきりするし、もう少し出演者のセリフが訴えかけるものになるのではないかと思った。前振りとは裏腹に技術も大変よかった。
 - ・素人とは思えない程舞台など素晴らしかった。キャラクターの設定が良かった。「葉っぱのフレディ」も題材として取り上げたらどうだろう。(65歳)
 - ・人形劇の動き、ゆったりとしたテンポなど良かったが、内容の良し悪しはわからない。(31歳)
 - ・ストーリーの展開も背景も人形の動きもとても良かった。(34歳)
 - ・人形の動かし方や場面展開などスムーズでとてもよく仕上がっていた。(34歳)
 - ・内容は大人にとってよくわかった。涙がこぼれた。人形を扱う方は、顔も黒い布で覆うなどすると、気にならなかったと思う。(35歳)
 - ・関係者のご苦労されたことが想像された。(72歳・男)
 - ・子どもの頃、死に対する恐怖がものすごく大きく、回りの大人たちは死は怖いものということだけしか教えてくれなかったような気がする。このような人形劇を通して死を見つめる機会があることは、子どもたちにとってとても良いことだと思う。地域でも開催してほしい。(44歳)
 - ・人形劇のように子どもに死を教えることは自然で良いと思った。(62歳)
 - ・難しい言葉もわからない小さな子どもに生と死を教えていくことはとても大変だが、それを克服できるヒントを今回の人形劇で得たような気がした。(21歳)
 - ・今は核家族になっており、家で看護するのも少ないので、説明も大変だと思う。このような子どもと一緒に聞く(見る)ことはこれからは大事な事と思う。(64歳)

【ワークショップについて】

- ・今後もこのような講演があれば参加してみたい。
- ・託児があり嬉しかった。生と死を考えられるこのような講座をお願いします。
- ・休憩中にPower Pointで映し出されていた映像を開演前に映したら、子どもも興味を持つし、私たちも「わかりやすく教えることができそう」と考え、素晴らしい導入になるのではないのでしょうか。
- ・子どもがいれば、家に帰って話す。

【デーケン先生の講演を聞いて】

- ・内容が具体的で良かったです。積極的に自分の死を全うするとは、目からウロコが落ちるようなお言葉でした。いろいろ考えたいと思います。
- ・先生の生命に対する温かな思いが伝わってきました。
- ・先生のお話を聞いて、生と死の意味が今まで以上にわかりました。
- ・感銘を受けました。このお話を思い出し、自ら「生きがい」をもって行きたいと思います。
- ・ユーモアたっぷりで素晴らしいものでした。一番学んだことは「人間らしく生きるのは、とても大切である」ということです。人間が存在し生きていく以上はユーモアが必要であり、人生を豊かにしていくことが求められます。これらのことを考えていく上での知識を得られて本当に良かったと思っています。
- ・なぜ死の準備教育が必要なのかなど、あらためて考えさせられました。死を知ること＝時間の尊さを知る、人に優しくなれる、、、とても印象に残りました。
- ・死を学ぶということは、いかに生きるかということであることをあらためて感じました。先生がモットーとされているユーモアをまじえながら、楽しく聞くことができたと同時に、いろいろと考えさせられました。貴重な講演をありがとうございました。
- ・タイトル通りユーモアたっぷりのお話で、途中全く飽きさせない話術に驚きました。ひとつひとつ胸に落ちるお話、自分自身の今現在の生き方まで振り返させられる素晴らしい説得力でした。お話をお聞きできたこと幸運でした。
- ・とてもわかりやすいお話で、ユーモアもまじえていただいたので、聞き入ることができました。人形劇、講演を通して自分が死について考えることもできたと同時に、死を通して生を考えることもできました。また、インターナショナルな生活をされてきた先生のお話を聞くことで、自分にはない新しい価値観に触れることができました。
- ・大変有意義に感じました。死の準備教育が必要なこともよくわかりましたし、ユーモアの大切さを先生が身をもって示してくださり、自分もこれからこの点を心していきたいと思います。
- ・先生のお話から、コミュニケーションの重要性を知りました。やはり幼い子どもに対しても正直に話をするという事は大事なのだなと思いました。

【死について思うこと】

- ・小さい頃から「生きる」「死ぬ」って考えること、これからは大切だと痛感している。(56歳)
- ・生き物が誰しも必ず死ななければならないことを人は誰しも触れたがらない。口にしたくない、不吉なものとして考えてきた。子どもの目などから触れさせずに来た時代が長かった。これからはノーマルに死の場面に立ち会える時代が来てほしい。(65歳)
- ・死は言葉で言うと難しい。親子で一緒に過程を経て経験していくことが、自然に死について学べる。その後も思い出を語ったりして、思い出して死を感じることができる。
- ・身近にある死のことを子どもの頃から教えるということは、とても大切なことだと思っている。小さな頃から死とはどのようなことか、それをどう考えていくかを自分の中に持つことは、大人になっても大切な者の死、そして自分自身の死についても広い視野で考えていけると思う。(21歳)
- ・自分自身、両親を病気で早く亡くし、ずいぶんつらい寂しい思いをしてきた。子どもには私のような

体験を味あわせたくない。(39歳)

- ・両親ともにクリスチャンで、幼い頃から教会に通い、そのためか家族内でも死について語る機会が多かったように思う。小さい時には難しくわからなかったこともあるが、成長するにつれ、そういった生きること、死ぬことについての教育が、私の人生観、自己概念そのものに深く影響していると感じるようになった。いつか自分に子どもができれば、きちんと子どもと話をしたい。(21歳)
- ・自分の家族の自殺未遂(かなり昔)について、どう自分が捉えて処理したらよいのか、未だにわからなかったモヤモヤしていた部分が、これから解決していきそうな感じがした。ぜひ本を読んでみたいと思ったし、生と死についての教育は大変必要だと思った。自分が当時受けていれば変わっていたかもしれない。(23歳)
- ・「死」ということは、考えれば考えるほど奥の深いテーマだと実感した。心理的な死、社会的な死、文化的な死、肉体的な死という4つの総体的な死があるということ、これからはこの総体的な延命が重大な課題となっているということは、とても勉強になり、今までどうして気づかなかったのかと考えさせられた。死というテーマはタブーなテーマとして、避けて通ってしまいそうだが、そうではなく正直に嘘をつかず、積極的に話し合っていくことが大切だと思った。今まで死をタブー視してきた結果、死の教育を受けてこなかった若者の自殺が減るのではないかと思った。(21歳)
- ・大人も子どもも「生と死を考える日」として自殺やAIDS、ドラッグなど話し合えると良い。親の中にも自然にわかるだろうとか、誰かが教えてくれることとして、きちんと子どもに向き合って話し合うことがないのではないか。社会全体がそんな風に話し合えるようになることを願う。(44歳)
- ・子どもにより、その子の生育歴、親子関係、家族構成などいろいろな条件により、死を伝えるタイミングがあるのかなと思った。(34歳)

2. 教育プログラム実践例①

1) 人形劇のテーマ

『死ぬってどういうことなのか』

- (1) 対象となる年齢：死の概念発達が進む年齢であるとされる小学1年から3年生ぐらいとした。
- (2) 題材：高齢社会化、核家族化などにより、祖父母との死別体験も青年期以降に向かえる場合が多くなっている。そこで、身近では人の死を経験する機会よりも、飼っているペットの死を経験することが多いのではと考え、それを題材とすることに決めた。
- (3) 脚本に入れる内容：死の概念発達の研究では、次の要素があげられ、これらを正しく理解することが死がどういうものであるか理解することとされている。
 - ・生物と無生物の識別：例えば人には命があるが、人形には命がない、生きてはいないと理解すること。
 - ・死の不動性：死んだ人は動かない、死によってそれまでの生体の機能が停止すること。
 - ・死の不可逆性：死んだ人は生き返ることはできないということ。
 - ・死の不可避性あるいは普遍性：誰でもいつかは死ぬ、避けられないということ。これら死の概念の構成要素を入れ、さらに、残された者たちが死別の悲しみをどのように受け入れたらよいのか、考えられるように脚本を作った。

2) 人形劇①「ぼくの心の中に…」ストーリー

ある日、自分の留守中にペットの犬フーを亡くした少年ケンが、母親に犬はどこかへ行ってしまったと言われる。納得できないまま眠ったケンは、夢の中で犬をさがす旅に出かける。そこで、ケンは3匹の動物（ライオン、オオカミ、フクロウ）に出会い、ライオンから「死は誰にも訪れ、避けられないこと」、オオカミから「死んだ者は動かないこと」、フクロウから「死んだ者は生き返らないこと」を教えられる。そして、亡くなったフーにも会い、「ぼくが死んでも、君の心の中に生き続けているんだよ」と教えられる。ケンが夢の中の出来事を両親に話し、「ぼくの心の中に生き続けるフー」について考える。(約25分)

3) 実践対象

伊那市内のI小学校4年生30名。

担任教諭および校長先生の許可を得て、授業時間内に行なう。

4) プログラムの展開

授業時間前に人形劇の舞台設置を行い、子どもたちを迎えた。人形劇は「さよならしたこと（死別体験）を、よかったら私たちに話してくれませんか？」というナレーションで終わるようにしてある。司会者1名がクラス全員にこの質問を投げかけ、子どもたちは挙手にて自分の体験したことを話すようにした。中には話すことが苦手という子どももいるので、最後は全員に感想を書いてもらった。

- (1) 導入(5分)：担当者の自己紹介、授業方法および人形劇の説明を行なう。

わかりやすい説明方法で子どもたちの興味をひきつけるようにする。

(2) 人形劇の上演 (25 分)

子どもたちがどのような反応を示しているか観察する。(許可を得てビデオ撮影も行なう。)
飽きないように、場面転換の際は、スムーズに行う。

(3) 話し合い (40 分) : 人形劇の話や自分の体験談をもとに、死について考え、死ぬことをどう思うか、命の大切さについて話し合う。

自分の体験など話をしたい子どもに挙手させ、自由に話してもらう。こちらの意見や考えは押し付けず、子どもの発言内容を繰り返して、みんなに語るようにする。

話したくない子どもには強要しない。

(4) 感想文を書く (15 分) : 感想を含むアンケートを書いてもらう。

友人に見られたくない場合もあるので、書いた紙は封筒に入れて出してもらう。そのため、何でも書いてよいことを伝える

5) 子どもたちの反応

人形劇は約 25 分かかったが、その間私語もなく集中して見ることができている。劇の感想も「死ぬということがどういうことかわかった」「命の大切さがよくわかった」などが多く、こちらが意図した内容を概ね理解できたようであった。アンケートの結果、死別体験があると答えた子どもは 26 名で、ほとんどが飼っていた動物の死を経験していた。身内の死の体験を話す子どもも数名いたが、同居していない曾祖父母や祖父母の死が多く、「よくおぼえていない」とその時の様子を話す子どもが多かった。死ぬことについてどう思うかには、「悲しい」「怖い」「苦しい」というマイナスなイメージの答えが多く、自分が死ぬことについて考えた場合も、「悲しい」「怖い」と話しており、もし自分が死んだら「両親が悲しむ」とほとんどの子どもが話していた。命を大切にするためにはどうしたらよいかという問いには、「食事に気をつける」「事故に遭わないように注意する」「友だちをたくさんつくる」などと話していた。

また、アンケートの結果、半数以上の子どもが死について理解していると答えていたが、話し合いの中で死別体験を話す様子などから、まだ死を遠い存在としてとらえていることもうかがえた。しかし、「悲しい」とか「怖い」と自ら感じている死から命を守るために、自分でできることを子どもなりに理解していることもわかった。死について知ること、生の尊さを知ることがこの授業の目的でもある。死に対してマイナスのイメージが大きいこともわかったが、その恐怖から単に逃れるために命が大切という認識にならないように配慮することも必要であると感じた。

◇「死ぬ」ってどういうことか知っていたか。

人形劇を見る前から知っていた	22 名
人形劇を見てわかった	6 名
よくわからない	2 名

◇ペットなどとの死別体験 ある 26 名 ない 3 名 おぼえていない 1 名
 ハムスター (5) 犬 (3) 鯉 (2) 鳥 猫 (学校で飼っていた) ウサギ 子馬 やぎ
 祖父 祖母 祖母のきょうだい 生まれてくる前のきょうだい

*ペットが死んだ時何をしたか 埋めた 9 名

*両親 (あるいはまわりの人) はなんと言っていたか

何も言わなかった (3) 「お星様になって見てくれる」「天国でありがとうと言っている」
 「みんな必ず死んでしまうもの」(2) 「短い命もある」「死んだら感じられないよ」
 「病気で死んでしまったね」「年をとっていたから死んでしまった」「死ぬってことは悲しいんだ」
 「いなくなって淋しいね」「かわいそう」「かわいそうだけど仕方がない、埋めてあげよう」
 「埋めればいいよ」「前の人が散歩に連れて行った」「前の家に泊まりに行った」

*その時どう感じたか

とても悲しかった (7) 悲しかった (3) ちょっと悲しかった 泣いた (3) かわいそう (2)
 年だからしょうがない 不思議に思った すぐそばにいる気がする

◇「死ぬ」ってどういうことだと思うか

悲しい (10) こわい (3) 苦しい (2) 不思議

この世にはいない (5) 誰とも会えなくなる (5) 天国へ行く 知らない所へ行く

戻ってこない 死んでも心の中にいる

話したり聞いたりできなくなる (4) 動かなくなる (2) 何も感じなくなる (2)

生きているという感じがしない 痛みも感じない 身体が冷たくなる 記憶がなくなる

家族と話したり、元気に走ったりできなくなる 両親が悲しむ

生きているものは死ぬ 人間も 80 歳ぐらいになったら死ぬ お金でも何もできない

〈人形劇を見てわかった子どもの回答〉

死ぬってゆうことは、お金でも何もできない。

死んだペットや人はもう二度と戻ってこないし、会えないから悲しい。

死ぬっていうことは、私の知らない所へ行ってしまって二度と会えないこと。

悲しいことだと思う。

死ぬってことは、とても悲しくて苦しいことだと思う。

人間も年をとって 80 歳ぐらいになったら、もう死んじゃって、犬もウサギも生きているものは死んじゃうよ。

〈よくわからない子どもの回答〉

かなしい

◇人形劇の感想

ケンがいない時にフーは死んでしまったから、こんなことがぼくに起こったら悲しい。

フーは、ケンがキャンプへ行っている間に死んでしまって、フーに会って「さよなら」と言ってやって、フーもケンも嬉しかったし、心の中でフーはいる、このことは忘れないと思う。

ケンやフーがとても悲しそうだったと思った。

私は主人公のペットが死んじゃって、ちょっと涙が出ました。

誰もがみんな死んじゃうってことがわかったし、フーも嬉しかったり悲しかったり、いろいろのことを夢で見れてケンは嬉しかったと思います。今日はとてもいい劇を見れてよかったです。

命の大切さが自分の気持ちの中にどんどんこんなに大切だと思いました。

フーも死んでいて、フーも犬で生き物だから、80歳ぐらいで死んで生き物も犬も死んでしまった。

なんか悲しいこと。みんないつか死ぬということ。

ケンがキャンプへ行っている時に、フーが死んじゃっていなくなっちゃたけど、夢の中で会えてよかった。ケンは大好きだったフーを探して森の中へ行っった。そこでふくろうおばさんや狼とライオンおじさんの話を聞いて、ケンもよくわかったと思います。

とても悲しいお話で、でもケンという男の子は死ぬということがよくわかったんだなと思う。

ケンがフーを大事に飼っていたけど、フーは病気で死んでしまった。ケンが帰ってきたら、フーは死んでしまってたケンはとっても悲しくなって泣いてた。ケンは森か林に入ってフーを探している途中に狼とライオンとふくろうに出会った。ふくろうやライオンが必ず生きているものは死んでしまうと教えてもらった。

ケンがフーを大切にしていた気持ちがすごくよく伝わってきました。

ケンの大切なフーが死んじゃったとき、ケンはキャンプへ行っていたから「さよなら」も言えなかったのは、とてもかわいそうだった。

ケンとお母さんとお父さん、フー、みんな家族。人が1人でも死んで悲しいと思います。みんなで悲しいと思うよ。

ケンはフーのことを思って探しに行ったりして、いろんな動物に死ぬことを教えてもらって悲しいお話でした。

ケンの友だちフーが死んじゃってかわいそうだと思った。

ケンの友だちが死んでしまうって言うことが悲しいと思いました。

ケンはフーが死んでしまってたとても悲しいと思った。

ケンはすごくフーを大事にしている、そのフーが死んでしまってたとてもかわいそうだと思った。

主人公ケンは大好きなペット・フーのことをかわいがって、フーが死んでしまってた大ショックだったこともあったけど、大人になったら忘れてしまうかもと言っていて、ぼくもそういうことあるかもしれません。

ケン君はフーのことをとても思っていて、ずっと忘れないって思ったところがすごい思いやりがあるんだなって思った。

主人公のケンはとても仲のいいフーと一緒にずっといたかったと思った。私も犬を飼っているんだけど、いつかフーみたいになってしまうのかなと思った。

死んでしまうというのはこんなに悲しい、こんなにやな気持ちになるってということがよくわかりました。

すごく命のことがわかった。

命の大切さがよーくわかってよかった。

すごく命の大切さがわかった。

人間も動物もいずれは死んじゃうってわかった。

人やペットはいずれ死ぬということがわかって、本当によかった。

とても勉強になりました。ありがとうございました。ケンとフーの仲がいいと思う。

かわいそうな人形劇だった。

3. 教育プログラムの実践例②

1) 人形劇のテーマ

『いのちを大切にする』

- (1) 対象となる年齢：死の概念発達が進む年齢であるとされる小学1年から3年生ぐらいとした。
- (2) 脚本に入れる内容：誰にも悩みやコンプレックスはあり、それでも生きていくことに価値がある。たとえ、コンプレックスがあっても、生きていていいんだよということを理解してもらえらるような内容にした。また、弱い立場にある人への思いやりについても考えてもらえらるよう、脚本を作った。

2) 人形劇②「赤い鼻のポポー大切なこと」ストーリー

生まれつき鼻が赤くて大きいため犬のポポはいつもいじめられている。母親は、そんなポポを励ますのが、友だちのできないポポは赤い鼻が嫌で仕方がない。ある日、ポポは目の見えないオオカミ・テツと出会い、鼻のことを隠して友だちになる。しかし、嘘をついたことがばれそうになり逃げ出す。途中、青虫をいじめているライオン・サダと出会うが、こわくて逃げ出し、ますます自己嫌悪に陥る。そして、むかし青虫だった頃にいじめられたという蝶と話をし、テツと仲直りすることにする。さらに、サダが実は家族からはバカにされている話を聞き、誰もが弱さや優しさを持っていると気づく。そして、自分の鼻を「この鼻でもいいや」と思うようになり、鼻よりも大切なことについて考える。(約15分)

3) 実践対象

駒ヶ根市内のH小学校3年生31名。

担任教諭および校長先生の許可を得て、授業時間内に行なう。

4) プログラムの展開

授業時間前に人形劇の舞台設置を行い、子どもたちを迎えた。人形劇は「ポポは、鼻のことばかり気にしていましたが、本当は一番大切に考えなければいけないことは何だったのでしょうか？みなさんはどう思いますか？」というナレーションで終わるようにしてある。司会者1名がクラス全員にこの質問を投げかけ、子どもたちは挙手にて自分の考えを話すようにした。中には話すことが苦手という子どももいるので、最後は全員に感想を書いてもらった。

- (1) 導入(5分)：担当者の自己紹介、授業方法および人形劇の説明を行なう。

わかりやすい説明方法で子どもたちの興味をひきつけるようにする。

- (2) 人形劇の上演(15分)

子どもたちがどのような反応を示しているか観察する。(許可を得てビデオ撮影も行なう。)

飽きないように、場面転換の際は、スムーズに行う。

- (3) 話し合い(15分)：人形劇の話をもとに、大切なこととは何かについて話し合う。

自分の体験など話をしたい子どもに挙手させ、自由に話してもらう。こちらの意見や考えは押し付けず、子どもの発言内容を繰り返して、みんなに語るようにする。

話したくない子どもには強要しない。

- (4) 感想文を書く(20分)

5) 子どもたちの反応

人形劇は集中して見る事ができていた。ただ、投げかけの言葉である「大切なこと」については、少し難しかったようで、なかなか発言がみられなかった。感想文をみると、大切なこととして友だちに関することが多く、次いで、やさしい心や気持ち、正直なことが多かった。

人形劇を見ての感想

2002.7.19 実施 回答 30 名

◇主人公のポポのことをどう思いましたか？

○かわいそうだった。(21)

- ・鼻のことでいじめられていた。(2)
- ・鼻が大きくていじめられていた。(4) ・赤い鼻のことでいじめられていた。
- ・みんなにいじめられていた。(5) ・ライオンにいじめられていた。
- ・鼻が大きくて赤くなっていたから、友だちにいじめられていた。
- ・赤い鼻だし、鼻大きいし、友だちいないし、嫌われるから。
- ・鼻が大きかったから。(2) ・鼻がひとりだけ赤くて。
- ・友だちができていなかったから。
- ・ポポは鼻が大きいけど、心がやさしい犬なのに、仲間に入れてくれなくて。

○かわいかった。(6)

- ・鼻が大きくてかわいい。 ・赤い鼻でもかわいい。
- ・鼻が大きいし、模様がかわいい。

○いじわるをされて悲しかったと思った。

○最初は鼻が大きいからっていじめられていて、いも虫がいじめられている時、勇気が出せなくて、でも結局は「いも虫くんがかわいそうだよ」って言えてすごかった。

○友だちを大切にしている、いいことしてる。

○鼻がでかい。 ○鼻が大きくて痛そうだった。 ○鼻が赤くて大きくて面白かった。

○鼻がでかくて赤くて、まるでトナカイだった。

○毛が多くてフワフワで気持ち良かった。

○いじめられているから弱虫。

○いじわるしている。

◇いじめていたライオンのことをどう思いましたか？

○いけないところも良いところもある。(8)

- ・悪いライオンだと思ったけど、最後にサダにも良いところがあって、悪いところもあると思った。

- ・最初は青虫をいじめていたから、いけないと思ったけど、最後の方でテツがやさしいと言っていたので、ほんとはやさしいんだなと思った。
- ・いじわるだけど、心はやさしいと思った。
- ・ポポを最初はいじめていたけれど、足が遅いのがポポと同じことを知って、いじめるのをやめた。
- ・いじめるのはダメだけど、目の見えないオオカミさんを助けてえらかった。
- ・青虫をいじめていたけど本当は友だちのことをちゃんと考えていたから、いいライオンだと思った。
- ・悪いけど、ライオンは足が速いけど遅いという悩みがある。
- ・いじめていたけど、やさしいところがあるのが不思議だった。ライオンのことが良いのか、良くないのかわからない。

○良くない (12)

- ・青虫をいじめていけないと思った。(7) ・いじわるだった。(4)
- ・いじわるしていて悪い。
- ・友だちの嫌なことを言っていた。

○かわいそう (3)

- ・いじめていたライオンはいけないけど、速く走れなくてお父さんに怒られていたから、かわいそうだった。
- ・足が遅いから、ポポと同じでかわいそう。
- ・サダくんもポポと同じで、足が遅くてお父さんに怒られていてかわいそうだった。でも大人になったら、速くなるかもしれない。

○足が遅くてお父さんに怒られていたけど、心はやさしいのでかわいいと思う。

○本当は自分もお父さんに怒られているんだけど、ポポに言えなかった。

○もう青虫をいじめるのをやめて、ポポたちと友だちになったらいいと思う。

○いじめていて、足が遅くて笑えた。

○青虫は小さいのにいじめたらかわいそう。

○青虫はライオンに気持ち悪いと言われてとてもかわいそうだった。

◇大切なことってなんでしょう？

○友だちのこと (13)

- ・友だちと仲良くできる気持ち (2) ・人をいじめない。(2) ・みんなと仲良くする。
- ・友だちの気持ち (3) ・友だちのことを考えないといけない。
- ・友だちの心や悲しみをわかってあげること。
- ・鼻のことばかり気にしないで、友だちを大事にすること。(2)
- ・友だちにやさしい気持ちや、友だちにやさしくする気持ちや、友だちを傷つけない気持ち。

○心や気持ち (8)

- ・こころ。(5) ・性格や気持ちやさしさ。
- ・心をやさしくすること。 ・やさしい気持ち

○正直なこと (5)

- ・正直に生きる。　　・うそをつかないで正直に言えること。
- ・テツくんは鼻のことでうそをついてしまったので、正直に言う。
- ・テツくんにあやまること。　　・友だちにうそをついたことをあやまること。

- 目と鼻と手と足と身体とかを大切にすること。
- 自分の鼻のことは気にしないでいい。
- いじめていたサダくんにも本当は弱いところもある。

- ポポは死んじゃおうかなって思っていたけど、テツは目が見えなくても死んじゃおうと思っていなかった。でも私は、ポポもテツも死ななくてもいいと思った。
- サダくんが青虫をいじめてたら、ポポはいじめをとめた方がいいと思った。
- オオカミさんにうそをつき、正直に言ってえらかった。
- ポポは自分の鼻のことを嫌だと思っていた。

- むずかしくてわからない。　　○おぼえていない。

4. 教育プログラムの実践例③

1) 人形劇のテーマ

2) 人形劇のストーリー

教育プログラムの実践例②と同じ内容。

3) 実践対象

四賀村内の A 小学校 3 年生 16 名。

学校からの要請で、授業時間内に行なう。

4) プログラムの展開

今回は、人形劇をビデオ録画したものを持参し、教室のテレビでそれを見てもらった。その後、人形劇最後の「ポポは、鼻のことばかり気にしていましたが、本当は一番大切に考えなければいけないことは何だったのでしょ？みなさんはどう思いますか？」という質問をクラス全員に投げかけ、子どもたちは挙手にて自分の考えを話すようにした。そして、最後は全員に感想を書いてもらった。

(1) 導入 (5分) : 担当者の自己紹介、授業方法および人形劇の説明を行なう。

登場する人形を見せて、この犬がどうなるか、子どもたちの興味をひきつけるようにする。

(2) ビデオの視聴 (15分)

子どもたちがどのような反応を示しているか観察する。

(3) 話し合い (30分) : 人形劇の話をもとに、大切なこととは何かについて話し合う。

子どもたちに、お互い友だちの良いところを話してもらおう。

自分が生まれてきたことについて考える。

(4) 感想文を書く (20分)

5) 子どもたちの反応

実際に間近で見る人形劇の上演と比較して、ビデオでは子どもたちの関心もうすくなるのではないかと心配したが、ビデオでも熱心に見入っていた。今回は、話し合いの中に、友だちのよいところを話し合うこと、自分が生まれてきてから今までのことについて考えることという具体的な内容を盛り込んだので、子どもたちからの発言も多かった。クラスの人数が 16 名と少ないことも活発な話し合いができた要因とも考えられる。感想では、大切なこととして、友だちに関することがやはり多かったが、自分の生まれたことを考えたため、いのちに関する回答も多かった。

◇主人公のポポのことをどう思いましたか？

○かわいそうだった。(5)

- ・鼻のことをへんだと言っていじめられていた。(2)
- ・ライオンにいじめられていた。
- ・鼻が大きいかいから。
- ・友だちができなくて。

○友だちができて良かった。(4)

○心がやさしい。(4)

○テツを助けて友だちになってすごいと思った。(2)

○うそをついたけど、あとから謝ったからいいと思った。(2)

○やさしかったけど、うそをついたからちょっと悪いなと思った。

○青虫を助けたので、勇気があると思った。

○鼻は大きくてもそれぞれみんな違うから別にしょうがない。

○自分の大きな鼻が気に入らないのかなと思った。大きな鼻でも自慢できるかわいい鼻なのになと思った。

○赤い鼻でかわいかった。

★いじめていたライオンのことをどう思いましたか？

○やさしい。(7)

- ・本当はやさしいからいつもやさしいままにいてほしいと思った。
- ・テツを家まで送って行ってすごい。

○良くない(4)

- ・お父さんたちに怒られて、それをポポたちにあたっていけないと思った。(2)
- ・いじめると心が傷つくからやめた方がいい。
- ・いじめると友だちがいなくなるからやめた方がいい。

○良いところもある。(2)

- ・いじているところはいけませんが、良いところもあって感心した。
- ・最初は嫌なライオンだと思った。

○気持ちはわかる。(2)

- ・お父さんやお兄さんにいじめられるのがくやしいから、ポポや青虫をいじめると思った。
- ・なんでいじめるとかわからなかったけど、自分もいじめられているから他の子の気持ちもわかると思った。

○強そうだと思った。テツと友だちになれてよかった。

○走るのが遅くても、別にそれはしょうがない。

★大切なことってなんでしょう？

○友だちのこと (16)

- ・友だちを大切にする。(3)
- ・友だちをいじめないようにする。(2)
- ・友だちにやさしくする。
- ・友だちを助けるやさしい心
- ・友だちにうそをついてはいけないこと (2)
- ・テツにあやまること
- ・友だちと仲良くする。(2)
- ・友だちができること
- ・友だちをいっぱいつくること
- ・人を助けること

○やさしい心 (6)

- ・やさしい心でずっといる (5)
- ・いじめてもやり返さない心
- ・心をやさしくすること。
- ・やさしい気持ち

○いのち (6)

- ・いのち (3)
- ・命を大切にする。(2)
- ・生まれてから今までのことを大切にする。

5. まとめ

教育プログラムとして実践した3例を通して、以下のことがまとめられた。

- 1) 人形劇は視覚的にも効果があり、小学生を対象にした場合の教材として適していると考えられる。ただし、実施するには人数の確保、照明装置など特別な準備が必要となる。
- 2) 飼っているペットの死という題材や、友だちとの関係について考える題材は、実際にそのような経験をしている子どもが多いため、話を想起させる場合に効果的であった。
- 3) 今回の実践例では、クラス全員で話し合いを行なったが、話の内容をより深めて考えさせるためには、小グループに分かれたほうがより効果的であると思われる。

「人形劇で子どもたちに伝えてみよう」と思ったものの、実は研究メンバー全員が、人形劇をやったこともなければ、脚本作りも初めてという状況であった。はたして、このメンバーで上演までできるのかと不安だったが、幸い保育士数名の協力が得られ、大小道具の製作や効果音の選定などに力を発揮してもらった。私たちが特に重視したことは、子どもたちが飽きずに見られるようにということであった。そのために、セリフの長さや場面展開に注意を払い、目を引きつける舞台装置にしようと考えた。上演後、子どもたちから「上手だった」という感想が聞かれ、初心者でも十分できることがわかった。ただ、子どもたちとの話し合いを進めるにあたっては、ある程度の技量が必要であると思われる。

6. 総合学習の時間における人形劇制作

総合学習：人形劇

——自分たちで考えた（選んだ）お話を人形劇にしてみよう！——

目的：人形劇を制作し、上演することによって、表現力を養う。

期間：平成14年10月～平成15年3月

方法

1. クラスを10人ずつ3グループに分ける。
2. 「命の大切さ」「死をどのように受けとめるか」などを主題とした本を何冊か子どもたちに紹介する。
3. 各グループで相談し、紹介された本あるいは自分たちで選んだ本の中から、人形劇を作る話を決める。
4. 話を決めたら、台本を作る。話す言葉など、みんなで考えたり、自分がその立場だったら、どんなふうに言うかななどの視点で考えてもらう。
5. ストーリーに合わせて、人形を揃え（必要なら作成し）、背景や小道具などを作る。背景や道具は省略できるものは省略して、簡易にする。
6. 配役を決め、セリフを言いながら人形を動かして、練習する。

実施内容

第1回 10/16（水）3,4時間目（10:55～12:30） 実施者；竹内

・これからの予定について説明

・本の紹介（朗読）

「さっちゃんのまほうのて」

「100万回生きたねこ」

「葉っぱのフレディ」

「みんな みんな ぼくのともだち」

他に持っていった本——「わすれられない おくりもの」

「こわいことなんか あらへん」

「どこにいったの？おじいちゃん」

・グループ分け

子どもたちの意見により、好きな人と組みたいということで、子どもたちが話し合っ、男女半々になるよう10～11人のグループを作る。（結構、話がまとまらなくて大変だった）

・次回までにどんな話がいいか、考えておくように伝える。

第2回 10/23（水）3,4時間目（10:55～12:30） 実施者；竹内 福岡

すでに各グループ毎に、人形劇にする話の本を決めていた。

「わすれられないおくりもの」「気のいいサンタ」「ねむれないの？ちいくまくん」

- ・各グループに分かれて、シナリオ作りを行う。本を見ながら、セリフを抜き出し、ナレーションを考え、原稿用紙に書く。(これは、女の子が中心になっての作業となり、男の子は遊んでしまう子が多かった。)
- ・次回(2週間後)までに、シナリオを作り、必要な背景や小道具を考え、作成するよう伝える。

第3回 11/13(水) 3,4時間目(10:55~12:30) 実施者;竹内

2週間ぶりであった。すでにセリフのみを抜き出した台本ができていた。背景も少し描き始めていた。

- ・各グループの台本をみて、セリフの手直しをする。(ほとんど直さなかった。)
- ・背景の続きを描く人と、セリフの練習をする人に分かれて、それぞれの作業を行う。(背景は枚数が多かったため、減らした。セリフの練習では遊ぶ子が多かったが、最低1回は最初から最後まで通してやっていた。)

第4回 11/20(水) 3,4時間目(10:55~12:30) 実施者;竹内 北山

制作過程のビデオを撮る。

人形が届いたので、各グループに渡し、人形がないものは紙などで作るように伝える。

- ・前回の続きで、背景作りとセリフの練習を行う。
- ・セリフに合わせて人形を動かしてみる。(人形を持ってうれしそうだった。まだまだ上手に動かせず、ほとんど人形を使って別のことで遊んでいた。しかし、最低1回はセリフに合わせて、最初から最後まで通していた。セリフが早口言葉のように早いため、ゆっくり話すように伝える。)
- ・必要な小道具を考える。

第5回 11/27(水) 3,4時間目(10:55~12:30) 実施者;竹内

- ・背景作りとセリフの練習
- ・小道具作り それぞれ工夫して作っていた。(眼鏡やネクタイなど家にあるものを持ってきて活用していた。)
- ・人形とセリフを合わせながら、動かしてみる。(人形で遊んでいる子も目立った。)

第6回 12/4(水) 3,4時間目(10:55~12:30) 実施者;竹内

- ・背景作りとセリフの練習(セリフはほとんど暗記していた!)
- ・セリフに合わせた人形の動き(少しずつセリフに合わせてられるようになってきた。)
- ・小道具作り(前回まで人形で遊んでいた子どもがおとなしい。何もしないので、チームメンバーからはずされてしまったらしい、、、)

第7回 12/11(水) 3,4時間目(10:55~12:30) 実施者;竹内 伊藤美和 大森寛子

- ・背景の仕上げ
- ・「ちいくまくん」のグループは、背景も動かしながら、一度通して行う。(どのように背景を出したらいいか相談している。)
- ・「サンタさん」は、人形がないので、鳥とあひるを作る。

第8回 12/18 (水) 3,4時間目 (10:55~12:30) 実施者;竹内 北山 扇

- ・「ちいくまくん」と「わすれられない、、、」は、背景も全部できたので、舞台を机で作り、練習を行う。(人形の細かい動きや、背景の出し方の手順など確認している。)
- ・「サンタさん」グループは、背景と小道具作り。(お化け作りを楽しそうに行う。ひとつ見本を作ると、同じものを2つ作った。)

第9回 1/15 (水) 3,4時間目 (10:55~12:30) 実施者;竹内

- ・どのグループも劇の練習。(背景の出し方がうまくいかなかったり、ナレーションが早過ぎたりするので直す。)

第10回 1/29 (水) 3,4時間目 (10:55~12:30) 実施者;竹内

- ・総練習 (どのグループも音楽を考えてきて、使っている。だいふ人形劇らしく上手になってきた。)

発表1 2/4 (火) K 保育園にて 「わすれられないおくりもの」「ねむれないの?ちいくまくん」

発表2 2/4 (火) 授業参観にて 「わすれられないおくりもの」「ねむれないの?ちいくまくん」
ビデオに録画

発表3 2/20 (火) I 保育園にて 「気のいいサンタ」「ねむれないの?ちいくまくん」
ビデオ録画

第11回 3/5 (水) 3,4時間目 (10:55~12:30) 実施者;竹内

- ・人形劇のビデオを見たあと、全員に感想を話してもらう。
人形劇をやってよかった。楽しかった。
最初はうまくいかなかったけど、上手にできた。
背景を書くのが大変だった。絵の具がなくなって同じ色を作るのに苦労した。
人形を上手に動かせることができて良かった。
ナレーションが上手にできた。声も大きく出せるようになった。
などの感想が聞かれた。

生を豊かにする死の教育

—地域づくり (community development) の視点から—

by 北山秋雄 (長野県看護大学)

はじめに

世界保健機構 (WHO) は、1948 年から施行されている WHO 憲章「可能な限り最高の健康水準を享受することは人類の基本的人権のひとつである」の文言を実現するために、1977 年の第 30 回世界保健総会で「2000 年までに全てのひとに健康を: Health for All by the Year 2000 (HFA2000)」を WHO の基本目標に設定した。しかし、貧困の拡大、冷戦後の地域紛争の多発、人口構造・疾病構造の急激な変化等によって大きく阻害され、その基本目標を達成することができなかった。このことを踏まえ、1998 年の第 51 回世界保健総会で「21 世紀におけるヘルス・フォー・オール政策 (HFA21)」が採択され、2020 年までの新たな基本目標が設定された。最新の世界保健報告 (2002) によれば、全世界の死亡数は 56,554,000 人であり、そのおよそ 29% が 18 歳未満の子どもが占めている。国連が「子どもの権利条約」を採択して (1989) から 12 年経てもなお「子どもへの投資が最善の投資である」という各国政府の認識が不足し、多くの子どもが高齢者と同様に死に直面している現状を鑑みれば、HFA21 の目標達成の道のりは極めて険しいと言わざるを得ない。

国内に目を転じると、栄養状態や衛生状態の悪化による死亡の減少、施設内死亡の増加、核家族化の進行等によって、死が日常の風景から隠れつつある。皮肉にも死が非日常化するにつれて「生きること」が豊かになるどころか、返って虚しく無機質化しつつある。文部科学省は、昨年度から「完全学校 5 日制」を導入して家庭、学校、地域の繋がりを強化したり、「総合学習の時間」を設けて自然や地域の人々とのかかわりを体験する学習に取り組みはじめ、厚生労働省も 2000 年 11 月に 21 世紀に取り組むべき母子保健ビジョンを「健やか親子 21」として提示し、その中で思春期の保健対策の強化と健康教育の推進や子どもの心の安らかな発達の促進などを主要課題として取り上げている。いじめ、虐待、援助交際を生き抜いてきた人々と接すると、他者や自身の心身に深い痛みを負わせ/負いながら、執拗に強迫的に自分の存在を確認していることに気づく。自分の存在が誰からも意識されないことがとても怖くて不安なようだ。自分の存在が誰からも意識されないことは社会的コンテクストからみれば「死」を意味する。老幼を問わずひとは誰かとつながりたい、かかわってほしいと思っている。この気持ちは自分がありのままで愛された体験をとおして信頼感を育くみ、転じて他者を思いやりいとおしむことによって益々「生」が豊かになっていく。こうしたポジティブな生の円環的仕組みをどう構築していくかが、今日、特に地域社会に求められている。ひとが生まれてから、生活をいとなみ、死んでいくまでの全てのプロセスが、ひととひととのつながりやかかわりによって構成された地域でなされている。ひとのいとなみはまた動植物の殺生によって成り立っている。この厳然たる事実から目をそらすことなく、子どもの発達レベルに応じて如何に伝えるかが問われている。いのちを大切にすることは世界 (自然、社会、地域、人々など) とつながっていること・かかわっていることを実感することであり、小さい頃からのこうした体験の積み重ねが生き抜く力 (Resilience) を育成する。

本稿では、本学の教員を中心とした研究グループが、子どもに対する死の準備教育(Death Education)のためのプログラム開発を目的として、地域で実践している人形劇活動を紹介しながら、地域づくり(community development)の視点¹⁾からみた「生を豊かにする死の教育」のあり方について検討する。

人形劇活動の経緯

1993年に私が Jim Boulden 博士の著書「Saying Goodbye」に出会ったことが発端である。読みすすむうちに感じたときめき、ドキドキして胸がキュッと締め付けられるような感動と、読み終えたあとのほっとする安らぎを今でも忘れることができない。その後 1995 年の阪神大震災まで私だけの秘密の書物として傍らにあった。この絵本は、Jim Boulden 博士が小児病棟で終末期の子どもたちの世話をするボランティアをした時の体験をもとに書かれたもので、1989 年にはじめて全米ホスピス協会最優秀賞を受賞し、わが国²⁾をはじめ世界中で翻訳されている。1998 年 2 月と 3 月に東京と名古屋で Boulden 博士の来日記念ワークショップが開催された。このことを契機に、1999 年 11 月に本学の小児看護学講座が中心となって「ボウルディン、生と死を考える会」が結成された。この研究会には当初から地域の保育士、小学校の教師、障害を持つ子どもの親等が参加して、自らの体験を語ったり絵本を読み合ったり保育・教育現場における子どもの現状等について話し合った。そうしたプロセスをとおして生と死に対する多様な「思い」が共有され、比較的子どもに受け入れられやすい「人形劇」を手作りで創作することになった。人形以外の脚本の創作、劇の背景づくり、声の吹き替え、BGM の選曲もすべて研究会のメンバーと学生ボランティアで行った。第 1 作「ぼくの心の中に…」は平成 13 年 2 月 15 日に、第 2 作の「赤い鼻のポポ」は平成 14 年 6 月 4 日にそれぞれ完成した。

人形劇のストーリー

第 1 作「ぼくの心の中に…」は、飼い犬をなくした主人公(小学校低学年)がいわゆる死の三原則(死の不動生、死の不可逆性、死の不可避性)を意識化し、そのことによる様々な心の変化や動揺を統合していくストーリーである。残されたものが死別の悲しみをどのように受け入れたらよいか考えられるように構成されている。

第 2 作の「赤い鼻のポポ」は、大きな赤い鼻のポポという犬が、生き物や物事に多様な生き方・見方があることを森の動物との交流をとおして知るようになり、誰でもありのままに価値があることを実感して劣等感を克服するとともに、弱い立場にあるものに対する想像力・思いやりを持ち始めるストーリーである。子どもが味わう劣等感は、誰かと比較されたとき・比較したときに自分ではどうにもできないと感じる切なさ・孤独・絶望のことである。いじめなどに巻き込まれている子どもに多様性の尊重、思いやりおよび生き抜く勇氣を持つことの大切さを伝えることを意図した。

上演

第 1 作「ぼくの心の中に…」は、平成 13 年 3 月 24 日「死ぬってどういうこと？」というタイトルで本学大講義室で初上演された。当日の準備には地域の方々が多数手伝いに来て

下さった(写真1)。当日は子どもたちを含め、地域の方々(約200名)が参加し熱心に観入っていた。親子と一緒に人形劇を観たあと、それぞれの親子が印象に残った場面を話し合っている光景は、劇の内容の深刻さとは裏腹に清々しささえ感じ、地域づくりの手法として人形劇が活用できる手応えを実感した。その後、事前に担任教諭に人形劇の主旨を説明するとともに録画した人形劇のビデオを視聴してもらって許可を得た上で、一般病院の院内学級の1年生から4年生の4名の子どもたちにそのビデオを見てもらった。子どもたちの反応や担任教諭との話し合いから4年生が適当と考え、K市の小学校4年生のクラスに対して総合学習の時間に、表のようなプロセスで上演することとなった(写真2,写真3)。

表 「人形劇「ぼくの心の中に…」を見て死について考える」授業のプロセス³⁾

時間	授業展開	指導上の留意点	予想される徴候
5分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業者の自己紹介 ・ 授業方法および人形劇の説明 	<ul style="list-style-type: none"> ・ わかりやすい説明方法で子どもたちの興味をひきつけるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 何が始まるんだろうという人形劇に対する興味をもつ。
25分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人形劇の上演 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもたちがどのような反応を示しているか観察する。(許可を得てビデオ撮影) ・ 飽きないように、場面転換の際は、スムーズに行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人形劇に集中する。 ・ 自分の体験を思い出す。 ・ 話の内容に興味がない。
40分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人形劇の話や自分の体験談をもとに、死について考え、死ぬことをどう思うか、命の大切さについて話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の体験など話をしたい子どもに挙手させ、自由に話してもらう。 ・ こちらの意見や考えは押し付けず、子どもの発言内容を繰り返して、みんなに語るようにする。 ・ 話したくない子どもには強要しない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 積極的に話したいと思ったり、消極的になったりする。 ・ 死に対して様々な感情が生まれる。
15分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 感想を含むアンケートを書いてもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友人に見られたくない場合もあるので、書いた紙は封筒に入れて出してもらう。そのため、何でも書いてよいことを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話すことが苦手な子どもも自分の思いを書けることができる

人形劇は約25分かかるがその間私語もなく集中して観ていた。感想を尋ねると、「死ぬことがどういうことかわかった」、「いのちの大切さがよくわかった」など、人形劇の意図が概ね理解できた様子であった。動物や身内との死別体験をしていた子どもたちは87%であったが、死ぬことについて、「悲しい」、「怖い」等の否定的イメージの答えが多く、もし自分が死んだら「お母さん、お父さんが悲しむ」とほとんどの子どもが答えていた。しかし、まだ死をよりよく生きることと関連づけて考えられない様子もうかがえ、死をとおし、いのちの大切さを伝えるためには構造化したプログラムの開発が必要と感じた。

第2作の「赤い鼻のポポ(写真4)」は、平成14年7月18日にK市の別の小学校で、人形劇「ぼくの心の中に…」を見て死について考える、とほぼ同様の授業プロセスを取り入れて

上演された(写真5)。上演後、子どもたちが人形劇に強い興味を示したことから、後日担任教諭が子どもたちと話し合い、10月から総合学習の時間を利用して人形劇を子どもたち自身で制作することになり、本学の教員も参加して子どもたちの学びのプロセスを観察することになった。3学期末までにストーリーを創作することが大変難しいため、既存の絵本を使ったが、絵本の選定、背景や人形の使い方等は3つのグループメンバー自身で考案していた(写真6, 7, 8)。どの絵本にするか決めるまでは何をしたいかわからず戸惑っていたが、その後、背景を描く者、人形を操る者、台詞を読む者、場面設定する者を自分たちで決めてそれぞれのペースで作業をはじめた。担任教諭によれば、当初はどうか不安だったが、子どもたちがイキイキとして自分の役割をこなすだけでなく助け合うことを学んでいる。家庭でも人形劇の制作の様子を話しているようだ。三学期末に保護者の前で上演することになっている。

課題と展望

かつて、多くの人々は自宅で生まれ、七五三、成人式のようなお祝いから介護、葬儀や火葬までも地域で行っていた。子どもたちは身内だけでなく地域の大人や友達仲間から社会生活上の様々な決まり事、生活技術などを学んでいた。ほんの半世紀前まで、人々は自分ひとりでは生きていけないことを自覚していたからこそ地域内の助け合いを大切にしたが、物質的・経済的に豊かになるにつれて自分ひとりでも不自由なく生きていけるという幻想が生み出され、地縁による互助の仕組みが崩壊していった。確かに、伝統的地縁によるしがらみが近代以降の価値観と見なされた個人の自己実現を阻害してきた要因のひとつであったが、問題は地縁それ自体ではなく、そのあり方・機能にあった。つまり、伝統的地縁は縁を利用したしほりや力関係による支配を内包していたが、今日では、地域住民が個々の多様な価値観を尊重しあい、生活体験にもとづく実感を共有しあいながら、協力して地域の課題に対応していく仕組みへと変わってきた。地域づくりとはまさに地縁ー地域とのつながりーによる「共助」の仕組みを構築するプロセスのことである。地域の老幼男女一人ひとりが多少にかかわらず個人的体験をし、利害関係を越えて関心の持てることから、地域社会の凝集力を高めることをめざす地域づくりには「生と死」のテーマは格好の素材といえる。現に、この種の講演会やワークショップを開催すると、子どもから、青年、成人、高齢者まで世代を越えて多様な人々が集まってくる。今後の課題は、このテーマを多世代を巻き込んで地域の共助や課題対応などの力量形成に継続して役立てる方策を教育委員会やNPOなどと連携して開発することである。今日、物質的・経済的豊かさの追求がグローバル・スタンダードの名の下でますます肥大化し、「心の空洞化」、「人間疎外」を助長している。行き過ぎた競争主義や能率主義を支配している価値観とは、「競争に打ち勝った者のみが幸福を手に入れることができる」という幻想である。競争主義や能率主義は共感や「共助」とは必ずしも相容れない所作である。

地縁による「共助」の仕組みを構築する地域づくりをとおして、地域社会が「競争」、「能率」にかわる新しい価値観を見いだす必要に迫られている。生と死をテーマにした人形劇の制作に夢中になっている子どもたちのイキイキした光景をみると、実体験の伴わない幾多の知識より感動を伴うひとつの実体験が如何に子どもの内的世界を豊かにすること



写真2. 地域の小学校4年生のクラスで「ぼくの心の中に..」を上演した教員とボランティアの学生

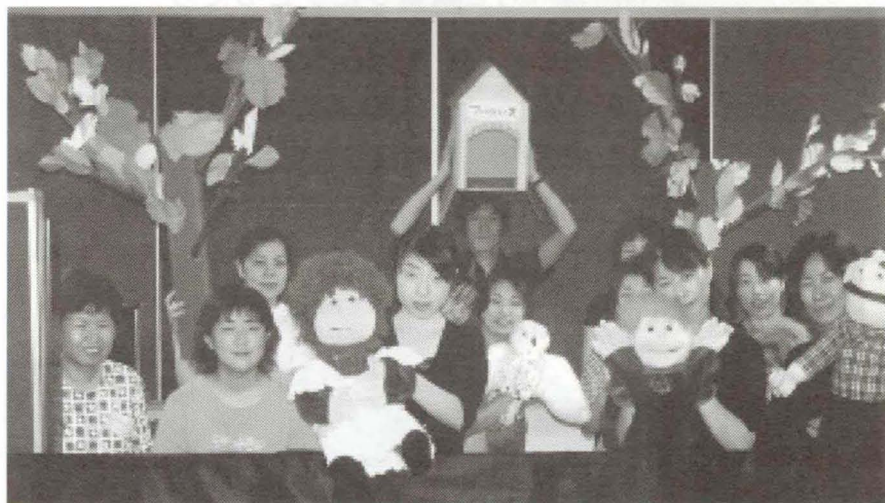


写真3. 「ぼくの心の中に..」を観劇した子どもたちと教師



写真4. 第2作「赤い鼻のポポ」の主演(中央)とその仲間たち



写真5. 「赤い鼻のポポ」を観劇した子どもたち



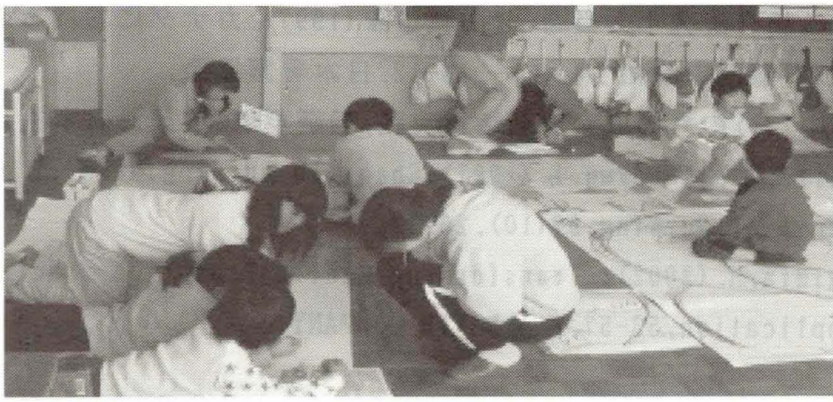


写真7. 人形劇の上演の練習をしている子どもたち

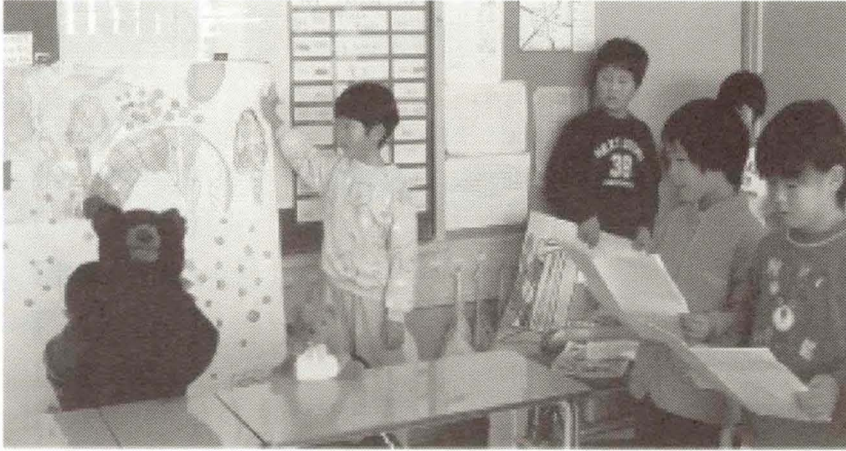


写真8. 練習を終えたあとの子どもたち



文 献

- 1) Jim&Joan Boulden(1989)/北山秋雄訳(1997):「さようなら」っていわせて,大修館書店.
- 2) Canadian Public Health Association(1990)/日本看護協会「先駆的保健活動交流推進事業」海外保健活動調査研究小委員会 北山秋雄訳(1997):カナダにおける地域看護～公衆衛生看護－その準備と実践について－,10-12,日本看護協会.
- 3) 竹内幸江(印刷中):いのちの教育の理論と実践,近藤卓編,実業乃日本社.
- 4) Vicenzi, A., White, K., & Berun, J. (1997): Chaos in nursing: Make it work for you, American Journal of Nursing, 97(10), 26-32.
- 5) Lynne, Y., Virginia, H. (2002): Transforming Health Promotion Practice: Concept, Issues and Application, 53-57, F.A. DAVIS COMPANY.

研究協力者

ポウルディン・子どもの生と死を考える会

宮澤 栄江

増野美智子

小林 奈津

福澤 秀美

長野県看護大学学生

相澤譜視子 (学部4期生)

小林 容 (//)

清水 利美 (//)

中山香代子 (//)

奈良定 健 (//)

二ノ宮あずさ (//)

根橋 幸恵 (//)

廣川 紗綾 (//)

宮腰 千鶴 (//)

村上しのぶ (学部5期生)

山口 智子 (//)

大森 寛子 (学部6期生)

丸山 敦子 (//)

福岡 由紀 (研究科修士課程)

人形劇① 脚本

「ぼくの心の中に…」

ポウルディン・子どもの生と死を考える会 作

ケン

みんな、こんにちは。

僕の名前は、ケンって言うんだ。

僕は、9歳になったばかり。

みんなは何歳かな？

僕には、フリーって言う名前の大切な友達がいるんだ。

白い犬なんだけど、僕が産まれる前から

僕の家において、ずっと一緒に暮らしてきたんだ。

毎日、散歩に行っただし、

そう、ピクニックも一緒に行っただよ。

フリーはね、人間で言うところ、もうおじいさん

なんだって、父さんが教えてくれた。

でも、僕にとっては、大切な大切な友達なんだ。

N

この所、何日もフリーは元気がありません。

ケンと、お父さんと、お母さんが、町の獣医さんにフリーを診せた所、

「フリーは、もう助からない病気だ」と言われました。

しかし、ケンは、それがどういふことなのか分かりませんでした。

日に日に弱っていくフリーを、みんなは心配しながらも、世話をしていました。

そんなある日、ケンは学校のキャンプに出かけることになりました。

ケン

大丈夫？ 苦しくない？

僕、今日から学校のキャンプに行かなきゃ行けないんだ…。

フリーを置いて、行きたくないんだけど…。

♪

照明つける

ケン、登場

舞台中央で

話す

暗くする

ケン消える

フリーと犬小屋

スポットのみ

照らす

フリーが

舞台の右端で

元気がない様子

スポットを消す

ケン登場

照明つける

ケン、リュック

を背負い、フリー、

横になったまま

尻尾は元気なく

振る

母

ケン、もう時間になったわよ。
心配だと思うけど、フーちゃんは、母さんが、
ちゃんと見てるから大丈夫よ。
帰ってきたら、また会えるでしょう。

ケン

うん。フー、ごめんね。
そのかわり、フーの大好きなラムネをいっぱい
持ってきたから、ここに置くよ。
これ食べて早く元気になってよ。

母

母さん、フーのことを頼んだよ。
分かったわ。心配しないで、いっぱい
楽しんでいらっしやい。

ケン

うん、フー行ってくるよ。待っててね。

ケン

フー、ただいま！

あれ？フーがいない。どこにいるの？
ほーら、お土産だよ。フー…。

母

お帰りなさい。キャンプは楽しかった？

ケン

母さん、フーはどこ？

母、声のみ

ラムネを置く

母の声の方を
向く感じで

ケン、左手から

退場

暗くする

フー消える

犬小屋中央へ

犬小屋のみ

スポットあてる

声と同時に

全照明

ケン、骨を抱え、

左手から登場

キヨロキヨロ

あちこち探す

母、右手より

ゆっくり登場

ケン、キヨロ

キヨロ探す

母

それがね…。
ケンがキャンプに行っている間に、どこか
遠い所へ行ってしまったみたいなの。
父さんも、母さんもあちこち探したけど、
見つからなかったのよ…。
ごめんね、ケン。

ケン

えー？フーが逃げちゃうなんておかしいよ。
今までそういうこと、なかったもん。
それに、母さん約束したじゃん。
ちゃんと見てるって！
母さんの嘘つき！

父

ただいま。
ケンは、キャンプから帰ってきたか？

母

ええ。でも、やっぱり、フーちゃんのことを
シヨックだったみたいで…。
帰ってきてからずっと、部屋で泣いているのよ。
あれ、そういえばずいぶん静かになったわねえ。
ちよつと見てきます。

父

あらあら、寝てしまったわ…。
うゝむ。
ケンが、産まれた時から、フーはどこへ行くにも
ずっと一緒だったからなく。
やっぱり、本当のことを言った方が
いいんじゃないのか？

少し頭をうなだ
れ、考えながら

ケン、骨を

投げつける

泣き叫び、左手に

ケン退場

犬小屋おろす

母は残る

暗くする

背景・居間

照明つける

父、左手より登場

少しの間

母、舞台右手に行
き、部屋を覗く

母 そうねえ。フーちゃんに二度と会えないと知ったら、ますます悲しむんじゃないかしら？

父 しかし…。

母 私は、ケンにどう伝えたらいいか分からないわ。

父 うゝむ…。

母 出来るだけ早く、フーちゃんの事を忘れられるように、これからは、なるべくフーちゃんのことについては触れないようにしましょうよ。

父 そうだなあ…。

ケン フー、フー…。

N 泣きながらケンは眠ってしまいました。そして、こんな夢を見ました。

ケン フー、探さなくっちゃ！
きつと、どこかに隠れているんだ。

そうだ！リュックの中には、フーの大好きなものもたくさんあるし、僕のおやつもある。
母さんと父さんが寝てる間に見つけてやるぞ！

ケン おーい、フー。
どこにいるんだよ。おーい。

ライオン おい、その坊主。

さっきから大きな声を出して、どうしたんじゃ。

♪ ← 暗くする
父と母消える
ケンとベッド
背景・森
ケン、ベッドで寝ている
ケンに スポットをあてる
静かに起上がる
ベッドとドア
片付ける
扉を出す
ケン、扉を開け左手へ退場
草を出す
照明つける
ケン右手より登場
背景まわす
ライオン登場

♪ 鳥の声
森の感じ

ケン 僕、坊主じゃなくて、ケンって言ってるんだ。
あのね、友達の方がいなくなっちゃったんだ。
毛がふさふさして真っ白な犬なんだけど……
ね、知らない？

ライオン うくん、悪いが知らんね。

ケン 森の中のことだったら、何でも
知っているでしょ。

ねえ、お願いだから僕と一緒に探してよ！

ライオン

一緒に探してやりたいんじゃないが……。
わしはこの通り、すっかり歳をとってな、
今となっては歩くこともままならんのだよ。

ケン おじいさんなの？

ライオン

ああ。昔は、森の王者と言われたわしも
今は役に立たんじやろう。わしも歳じゃ。
もう何十年も生きてきた。

ケン え、何十年も？

ライオン

そろそろ終わりが近いかもしれんなあ。
あと何日生きられるか……。
すまんなあ、ケン……。

ケン

えっ？終わりが近いって何？
どこかに行っちゃうってこと？

ライオン

そうじゃなあ。
わしの仲間も何人も、いなくなつたよ。

ケン

えっ、何人も？

ライオン 生きているものは、必ずいつかは、この世から姿を消すんじゃない。わしの親や、仲間がそうだったように、わしもいずれはいなくなるんじゃない。

ケン みーんな、みんな どこかへ行っちゃうんだ。

そうか。

だからフーもいなくなったのかな？

でも…。知らない所へ行くって嫌じゃない？

ライオン うーん…。

わしがこの世からいなくなっても、ケンは、わしのことを覚えていてくれるだろう？

ケン うん、おじいさんのことは忘れないよ。

ライオン わしの子ども達も、きつと覚えていてくれる。そう考えれば安心して、いなくなれるよ。

ケン だけど…もう一度、僕はフーにどうしても会いたいんだよ。

さよならもしてないんだよ。

ライオン ああ。

フーが見つかることを祈っているよ。

ケン いろいろ、教えてくれてありがとう。それじゃあ、おじいさんも長生きしてよ。

N ケンは、再び森の中を、フーを探して、一目散に歩き始めました。
すると…。

オオカミ うーん、うーん…。

少しの間

ケン左手へ退場
ライオン右手へ退場

背景まわす
ケン右手より登場

急いで
いる
音楽

ケン あれ、何の声だ？ フーかな？

オオカミ うーん……。痛、痛たたた……。

ケン 大丈夫？ どこが痛い？

オオカミ おお、この辺じや見かけない坊主だねえ。

ケン 友達のフーを探して、ここまで来たんだ。

おじさん、どこが悪いの？

お医者さん、行った？

オオカミ ああ、医者にかかっても治らない病気に
なってしまったな。

自分の力では動くことも出来なくて、こうして、
痛いのがまんしているんだよ。

ケン そういえば、フーもお医者さんに連れて行った
時、そんなこと言われたような気がする。

オオカミ あとは、この世を去る日が来るのを
待つばかりだ。

ケン ライオンのおじいさんもそう言った。
おじさんも、この世からいなくなるの？
やっぱり僕のフーもいなくなっちゃったの
かなあ。

オオカミ そうだよ。元気だった体は、全く動かなくなり、
もちろん呼びかけても、返事もない。

ケン えー！

オオカミ 温かかった体も冷たくなる。そして、
今まで感じてた痛みも感じなくなるし……。

オオカミ左の
草の影から
元気なく姿を
見せる

ケン

そんな〜。

オオカミ

喜びや悲しみも感じなくなるんだ…。

ケン

え〜！怖いよ。

オオカミ

そして、みんないつかは、この世から
さよならするんだ。
それがいつなのかは、誰にも分からない。

ケン

あっ！

僕のフーも病気だったから…
急いで探しに行かなくっちゃ！

オオカミ

坊主は、俺のことを覚えていてくれるかい？
俺がこの世とさよならをして、動かなくなつて、
坊主に返事をしなくなつても、こうして一緒に
話をしたことを覚えていてくれるかい？

ケン

うん。ずっと忘れないよー！。

オオカミ

そうか。ありがとうよ。

フクロウ

ホー、ホー、ホー…。

ホー、ホー、ホー…。

ケン

どうしたの？フクロウおばさん。

フクロウ

ホー ホー

ケン

どうしてそんなに悲しいの？

♪

少しの間

ケン左手へ退場

ケンが動き始めると
同時にオオカミ側の
草を少し動かし、オオ
カミが隠れ、人形をお
ろす

ケン右手より登
場し、その場で足
踏み

背景が動きフクロウ
の木が平行に移動し
て現われる。

泣いている様子
を見上げながら

ケン

そうか！おばさんも友達がどこかに
行っちゃったんだね。僕も友達の方が
いなくなつて、今、探している所なんだ。
おばさんの友達も、僕一緒に探してあげるよ。

フクロウ

ありがとうね。あなた、名前は何て言うの？

ケン

ケン

フクロウ

そう、ケン。ありがとう。
でも、私が探しているのは友達じゃないのよ。
私の息子なの。
それに、もう探しても見つからないのよ。

ケン

おばさんの子ども？

フクロウ

そう、一年前に事故でこの世から去つて
しまったの。

ケン

えっ、事故で？

フクロウ

もう、私があの子を、抱くこともできない。
声を聞くことも出来ないの。
どんなに泣いても、もう戻つてこないって…
分かつてはいるんだけど、やっぱり悲しくてね。

ケン

それは悲しいね…。

フクロウ

もう、それは元気な子だったのよ。
あの子の笑い声や泣き顔、腕白ぶりに、優しい所、
みんな可愛かったのよ。
今でもこうして目を閉じると
あの子でいっぱいになるの。

ケン

ずっと、忘れないでいるんだね。

♪

フクロウ

枝から枝へ

移動

フクロウ

初めは、もう二度と戻らないことが
信じられなくて、いつかきつとあの子が
帰ってくると思っただわ。
今でも、時々そう思うの。
だから、あの子のおもちゃは、そのままにして
あるの。

ケン

戻ってこないのに。

フクロウ

戻ってこなくても、私はあの子の思い出と、
ずっと一緒に生きていくわ。

ケン

僕も、もし、フーが二度と戻ってこなくなった
としても、やっぱりフーのこと忘れられないと思う…。

フクロウ

そうね…。

あなたとお話出来て、良かったわ。
気をつけて行くのよ。

ケン

おばさんも元気出してね。さようなら。

ケン

あっ！ フー、待ってよ、フー…。
どうして急にいなくなったの？
僕が嫌いになったの？
フーを置いて、キャンプに行ったから
怒っちゃったの？

フー

ケン、そうじゃないんだ。
私は病気で、この世から去ったんだよ。
この世から去るってことは…
死んだってことなんだよ。

♪



少しの間

フクロウ

右手に飛び去る

木をおろす

背景まわす

ケン、その場で

足踏み

暗くする

右手にスポット

右手よりフーが

現われ、ケン、

ハッとして追いかける

背景キンキラ

フー舞台中央で

振り向く

♪
風の
ような音

ケン

でも、フリー！
僕とさよならしていないじゃないか！

フリー

うん、ケンは、私のことをいっぱい心配してくれた。いっぱい好きでいてくれた。

ケンと走ったり、遊んだ事は

とっても楽しかったよ。

キャンプに行っていて、さよならは出来なかったけれど、これからも、ずっとケンの心の中にいるよ。

ケン

僕の心の中に？

フリー

そう。初めのうちは、私のことを思い出すだろうけど、ケンが大人になるにつれて、私のことは忘れていくかもしれない…。

ケン

そんなことないよ！

フリー

いいんだ。それも自然のことなんだよ。でも、私はケンの心の中にずっといる。だから、私は淋しくないよ。

さて、もう行かなくちゃいけない。

それじゃあ、元気でね。さようなら。

ケン

あつ、ちよつと待ってよ。

行かないで、フリー。

母

やっぱり、ケンには本当のことを話した方が良かったかしら。

私も、つい嘘をついてしまったけど、フリーがこの世からさよならして、もう、戻ってこないことをちゃんと話しましょうよ。

♪

フリーは左手へ

ケン追いかける

スポット消す

草をおろす

背景・居間

父と母登場

スポットを

あてる

父

ああ。本当のことを話した方がいいのかも…。
ケンも薄々感じているのかもしれないし…。

明日は、フーのお墓に連れて行って、きちんと
話すことにしよう。

ケン

父さん、母さん。

母

まあ。起きてたの？

父

どうしたんだ？

母

実は、フーのことなんだけど…。

ケン

僕は、今まで夢を見ていたみたいなんだ。

フーと会ったよ。今まで、フーと話してたんだ。

フーだけじゃないよ、ライオンのおじいさんや、

オオカミおじさん。

それに、フクロウおばさんも…

母

そう。どんな話をしたの？

ケン

みんなから、いろんな話を聞いたよ。

誰もが、いつかはこの世からさよならすること。

さよならしたものは、動いたり話したり出来ない

こと、そして、二度と戻ってこないんだって。

母

そう…。

ケン

フーは、この世にさよならをしなくちゃ

いけなかったんだね。

ホントは、僕や父さんや母さんと

一緒にいたかったけど、仕方なかったんだよね。

母

そうね。

♪

ケン右手より

登場

照明つける

ケン

僕、フーと遊んだこと覚えてる。
とつても楽しかった。これから大きくなって、
ひよっとしたら、フーのこと思い出せなくなる
かもしれないけど、
それでも、フーは僕の心の中にいるんだって。
フーがそう言ったんだ。

父

話そうか迷ったんだけど、フーはね、ケンが
キャンプに出かけた夜に、死んでしまったんだ。
病気だったのは、おまえも知っていただろう。

ケン

でもさ、僕がいない間に死んじゃうなんて…。
悲しいよ…。

父

たまたま、治らない病気だったから
仕方なかったんだよ。

ケン

でも、フーが死ぬまで、みんなで一生懸命
世話をしたよね。フーは幸せだったと思うよ…。
そうだね。

父

さあ、もう遅いから今日は寝なさい。

ケン

うん、分かったよ。

おやすみ、父さん、母さん。

父・母

おやすみ。

N

みなさん、どうでしたか？
みなさんの中にも、ケンとフーのように、
さよならをした人がいるかもしれないね。
その時のこと、良かったら、
私達に話してくれませんか？

♪

ケン右手へ

暗くする

人形劇② 脚本

「赤い鼻のポポー—大切なこと—」

ボウルディン・子どもの生と死を考える会 作

赤い鼻のポポ ——大切なこと——

【場面1】

暗転

ポポ登場 泣きながら歩いている。

子どもたちの声：見て！あの子の鼻、変なのオ。

あれって、夜になるとピカピカ光るらしいぜ。

ええ、ほんとお？ねえ、触るとうつるのかなあ？

きっとそうよ。うわあー！逃げろー！

あっちへ行けよ。(ザワザワしている)

ナレーション：この子の名前はポポ。生まれた時から鼻が赤く、大きくて、みんなにいじめられています。

【場面2——家の中】

ポポ：(泣きながら) 母さん。あのね、今日もみんながね、ぼくの鼻のことを馬鹿にするんだよ。

母：まあ、何て言うの？

ポポ：「夜光るんだ」とか「一緒に遊ぶとうつるんだ」とか。

母：そう、...

ポポ：うつったりなんかしないよね、光らないもんね。

母：そうよ。お母さんはポポのお鼻が大好きよ。それにポポは、すごくいい子だもの。

ポポ：じゃあ、どうしてぼくには友だちできないの？

母：……大丈夫、きっとできるわよ。

ポポ：できないよ！

ポポ、家を飛び出す。

【場面3——池】

暗転

ポポは近くの池に行き、池の水面に顔を映して眺める。

ナレーション：ポポは、家の近くにある池に行きました。そして、そっと池をのぞきこみました。池の水面には、赤くて大きな鼻をした自分が映っています。

ポポ、嫌になり水面をバシャバシャとかき乱す。

突然、バツシャーンと何かが池に落ちる音がする。

ナレーション：大変です。何かが落ちたようです。

ポポ：何だ何だ？

テツ (声のみ)：た、た、助けてえ！溺れちゃうよお！

ポポ：あっ！誰かが溺れてる！

ポポ、声のほうに向う。(池に飛び込んで、テツを助ける。)

ナレーション：ポポはいそいで声のする方へ行き、そこで溺れていた目の見えない狼を助けました。

【場面4——3と同じ池】

ポポにつかまって、テツ登場

テツ：ゲホッ、ゲホッ！助けてくれてありがとう。いつもはこんな失敗しないんだけど、本当にありがとう。ほくはテツって言うんだ。君の名前は？

ポポ：(鼻を隠しながら) ポ、ポポ。

テツ：ポポか、いい名前だね。

ポポ：あ、あのさ、テツはほくの顔を見て驚かないの？

テツ：えっ！どうして？

ポポ：んっ！いい、いいの。何でもない。

テツ：ほくは目が見えないから、誰も一緒に遊んでくれないんだ。だから、いつも一人ぼっちでつまらないんだよ。

ポポ：(うれしそうに) じゃあ、ほくが友だちになってあげてもいいよ。

テツ：えっ！ほんとに？目が見えないほくでもいいの？

ポポ：(偉そうに) いいよ！友だちになってあげるよ。明日、一緒に遊ぼうよ。

テツ：うれしいよ。ほくの友だちになってくれるなんて！明日ここで待ってるよ。

ポポ：うん。バイバイ。

ポポとテツが別れる。

【場面5——家の中】

暗転

ナレーション：ポポは、嬉しくなって、いそいで家に戻りました。

ポポ、踊るように家に戻ってくる。

ポポ：ただいまー。母さん、あのね、友だちができたよ。目が見えない子なんだ。だからほくの鼻のことわかんなくてさ。テツって言うんだ。テツは友だちがいないんだって。だからほくが友だちになってあげたんだ。

母：そう、……。(ひとり言で) 鼻のこと隠したままで、友だちになれるのかしら、……。

ナレーション：ポポのお母さんは、不安でした。

【場面6——公園】

暗転

公園でポポとテツが遊んでいる。頭上には、蝶が舞っている。

ナレーション：次の日、約束通り、ポポとテツは一緒に遊ぶことになりました。

ポポ：何して遊ぼうか、……。そうだ、かくれんぼしよう。…あっ、でも無理だよ。

テツ：そんなことはないよ。ぼくは目が見えないけど、耳や鼻や手や足、いろんなところで感じる事ができるから。

ポポ：どういうこと？

テツ：たとえば、臭いや音でポポのいる場所がわかるし、ポポに触れば、ポポの大きさとか顔の形だってわかるんだ。

ポポ：えっ！顔がわかるの？（あわてて鼻をかくす）

テツ：その人の心もわかる時があるんだよ。嘘をついているかどうか、なんとなくわかるんだ。

ポポ：あ、あのさ。き、急に用事思い出しちゃった。さ、さよなら。

ポポ、あわてて逃げる。

テツ：あっ、待ってよ。ポポ。

【場面7】

暗転

ポポ、しょんぼり歩いている。

ナレーション：ポポは、前にお母さんが言った言葉を思い出していました。

母（声のみ）：ポポ、あなたは鼻のことをとても気にしているけど、お父さんもお母さんもポポのことが大好きなの。あなたが生まれた時、本当に嬉しかった。優しく、正直な子になりますようにってお祈りしたのよ。ポポはその通りの優しい子になってくれた。私たち自慢の子どもなのよ。

ポポ：でも、、、テツに嘘ついちゃった。鼻も変だし、心も悪い。こんなぼくが生きていてもいいことはないよ。

【場面8——木】

ポポが歩いていると、サダが青虫をいじめている場面に出くわす。

その頭上には蝶が舞っている。

ナレーション：ライオンのサダくんが、また青虫をいじめています。サダくんは、ポポのことも「鼻が赤くて大きい」と言っっては、よくいじめるのです。

サダ：お前、気持ち悪いぞー。（青虫をつついて）

青虫が逃げ回るのをサダがいじめる。

ポポはためらうが、一瞬、止めようとして1歩踏み出そうとする。

ナレーション：ポポは、迷いました。かわいそうな青虫を助けたいのですが、サダくんがこわいのです。

サダがポポに気づく。

サダ：なんだよ、でか鼻。何か用か？

ポポ：そ、そうじゃないけど、、、青虫くん、か、かわいそうだと、お、思っ

サダ：なんだと！

サダがポポに近づこうとすると、ポポはあわてて逃げ出す。

ナレーション：やっぱりこわい。ポポは逃げ出しました。

【場面9】

ポポ、走り疲れて、しゃがみ込む。

そこへ蝶が飛んでくる。

蝶：ポポ、ありがとう。

ポポ：えっ！

蝶：青虫くんを助けようとしてくれたでしょ。

ポポ：蝶々さん、見ていたの？ でも、助けてあげられなかった、。やっぱり、ぼく、だめな子なんだ。

蝶：どうして？

ポポ：ぼくなにか、鼻もこんなだし、せっかくできた友だちにも嘘ついちゃって、...

蝶：でも、さっき、いじめられている青虫くんを見て、かわいそうだと思ってくれたじゃない。ほかの人の悲しみや辛さがわかるっていうのは、とても大切なことなのよ。

ポポ：ほかの人の悲しさや辛さを感じるってこと？

蝶：そうよ。自分が悲しい思いをすると、ほかの人の悲しい気持ちもわかるでしょ？ポポは、自分の鼻のことで、いつも悲しい思いをしていた。だから、それだけ、人の悲しい気持ちがわかって、優しくできる。すごいことよ。

ポポ：ぼくがすごい？

蝶：そう、すごい！

ポポ：友だちに嘘ついたのに？

蝶：これから、テツくんにも本当のこと話してみたら？きっと、許してくれると思う。テツくんも、目が見えない分だけ、人の気持ちがわかるんだもの。

ポポ：でも、こんな鼻だから、これから先も、きっといいことないよね。さっきの青虫くんだって、あんな身体じゃなかったら、幸せなのに。

蝶：ポポ、私も昔は青虫だったのよ。

ポポ：えっ、ほんと？だって、蝶々さんはこんなにきれいなのに？

蝶：青虫が大きくなると、私みたいな蝶になるのよ。私も昔はずいぶんといじめられたわ、...

ポポ：そうか！だから蝶々さんも優しいんだ。(少し考えて)じゃあ、ぼくの鼻も、大きくなったら、なおるかな？

蝶：それはわからないわ。でも、大切なのは鼻じゃないと思うけど。もっと大切なことがあると思うわよ。

ポポ：大切なこと？(少し考えて)ぼく、よくわかんないや。

蝶：きっと、これからわかる時が来るわよ。

蝶去って行く。

ポポ、蝶を見送ってから、テツのところに戻る。

【場面 10——6 と同じ公園】

ナレーション：ポポはいそいで、テツのところに行きました。謝らなくてはいけないと思ったのです。

暗転

ポポ：テツ！

テツ：ポポ！

ポポ：テツ、ごめんね。

テツ：急に帰っちゃったから、ほくのこと嫌いになったのかなって、心配したんだ。

ポポ：あのね、、、。(テツの手を自分の鼻にもっていく)

テツ：うわー、ポポの鼻って大きいんだね。かっこいいなあ。

ポポ：え？ほくの鼻がかっこいい？

テツ：うん。

ポポ：そうか、、、。テツ、遊ぼう！

そこへ、サダが通りかかる。

あわてて、テツの後ろに隠れるポポ。

サダはちらっと見て、肩を落として、通りすぎる。

テツ：どうしたんだい？

ポポ：ぼく、あの子、苦手なんだ。いつもいじめられるんだ。でも、今日は何も言わないで行っちゃった。どうしたんだろ。

テツ：ライオンのサダくんだろう？

ポポ：なんで、知ってるの？

テツ：サダくんは、ライオンだけど、足が遅いんだ。そのことを、いつもお父さんに怒られているんだよ。お兄さんにもバカにされている。きっと、また怒られたんだろう。

ポポ：そうなんだ。あんなに強そうにみえても、悩みがあるんだ。

テツ：誰だってそうだよ。きっと。でも、サダくん、この前、ほくの手をひいて、うちまで送ってくれたよ。やさしいところもあるんだ。

ポポ：サダくんも、ちゃんと、人の悲しみがわかるんだ。やっぱり、自分も悲しいことがあるんだ。

考え込むポポ

ナレーション：ポポは、思いました。強そうに思っていたサダくんにも、弱いところがあって、やさしいところもある。そして、この大っ嫌いだったポポの赤くて大きな鼻を、かっこいいって言ってくれる友だちもいる。この鼻でもいいやって、ほんの少し思いました。

テツ：何考えているの？

ポポ：何でもない。

二人で遊ぶ。

ナレーション：ポポは、鼻のことばかり気にしていましたが、本当は一番大切に考えなければいけないことは何だったのでしょうか？ みなさんはどう思いますか？